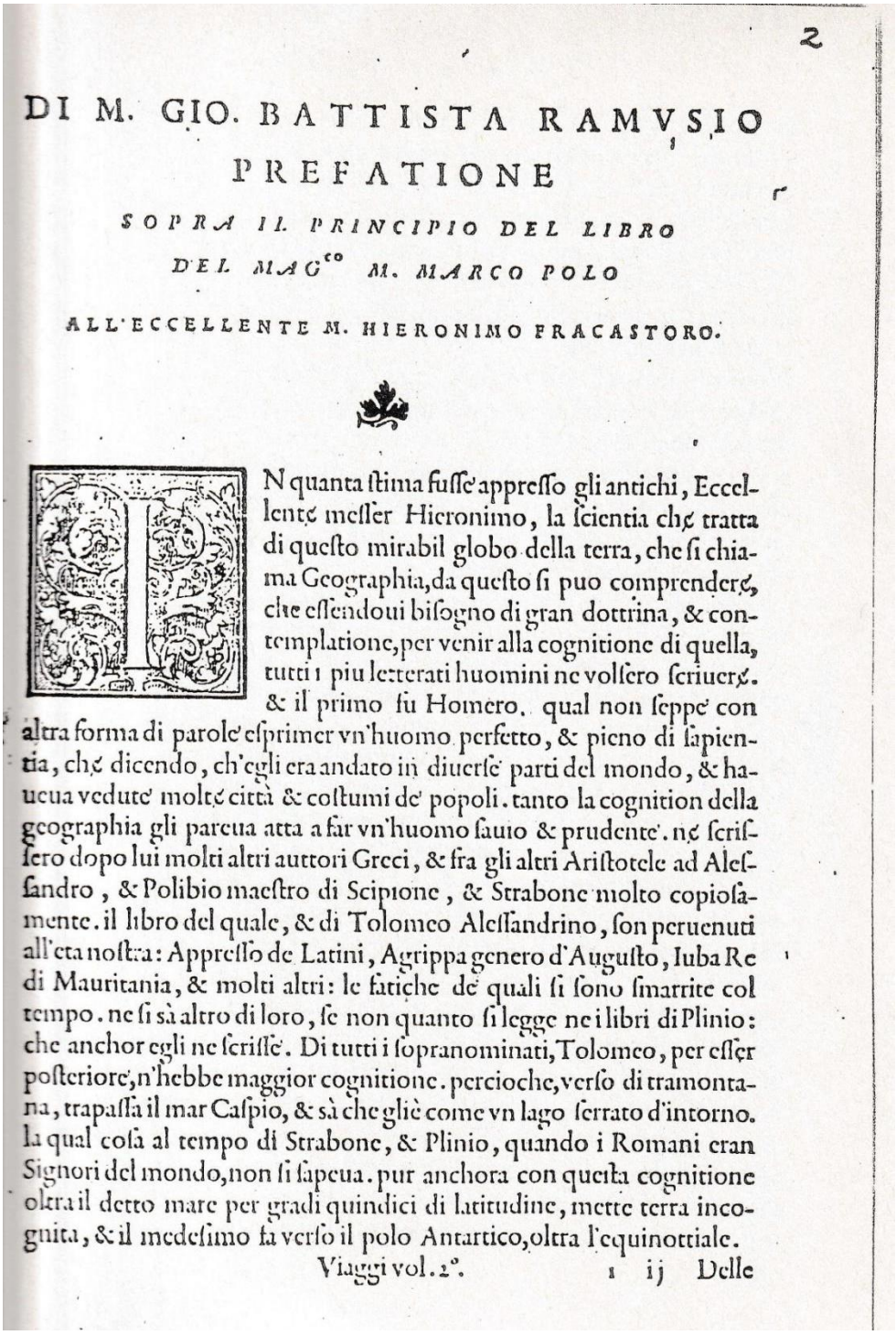
3「序文（一）」



2

DI M. GIO. BATTISTA RAMVSIO

PREFATIONE

SOPRA IL PRINCIPIO DEL LIBRO

DEL MAG^co M. MARCO POLO

ALL'ECCELLENTE M. HIERONIMO FRACASTORO.

IN quanta ſtima fuſſe appreſſo gli antichi, Eccellente meſſer Hieronimo, la ſcientia che tratta di queſto mirabil globo della terra, che ſi chiama Geographia, da queſto ſi puo comprendere, che eſſendoui biſogno di gran dottrina, & contemplatione, per venir alla cognitione di quella, tutti i piu letterati huomini ne volſero ſcriuere. & il primo fu Homero. qual non ſeppe con altra forma di parole eſprimer vn'huomo perfetto, & pieno di ſapientia, che dicendo, ch'egli era andato in diuerſe parti del mondo, & haueua vedute molte città & coſtumi de' popoli. tanto la cognition della geographia gli pareua atta a far vn'huomo ſauio & prudente. ne ſcriſſero dopo lui molti altri auttori Greci, & fra gli altri Ariſtotele ad Aleſſandro, & Polibio maeſtro di Scipione, & Strabone molto copioſamente. il libro del quale, & di Tolomeo Aleſſandrino, ſon peruenuti all'eta noſtra: Appreſſo de Latini, Agrippa genero d'Auguſto, Iuba Re di Mauritania, & molti altri: le fatiche de' quali ſi ſono ſmarrite col tempo. ne ſi sà altro di loro, ſe non quanto ſi legge ne i libri di Plinio: che anchor egli ne ſcriſſe. Di tutti i ſopranominati, Tolomeo, per eſſer poſteriore, n'hebbe maggior cognitione. percioche, verſo di tramontana, trapaſſa il mar Caſpio, & sà che gliè come vn lago ſerrato d'intorno. la qual coſa al tempo di Strabone, & Plinio, quando i Romani eran Signori del mondo, non ſi ſapeua. pur anchora con queſta cognitione oltra il detto mare per gradi quindici di latitudine, mette terra incognita, & il medeſimo fa verſo il polo Antartico, oltra l'equinottiale.

Viaggi vol. 2°. 1 ij Delle

図 1　序文（一）最初のページ（初版本）

「偉大なるマルコ・ポーロ殿の書の冒頭の部分に関するジョヴァンニバッティスタ・ラムージョ氏の序文、イェロニモ・フラカストロ閣下へ」[1)]

古えの人々のもとで地理学＜と呼ばれるこの驚嘆すべき学問＞がどれほど高く評価されていたかは、イェロニモ閣下[2)]、次の一事をもってして容易に理解できましょう。すなわち，この学問に通ずるには大いなる学識と思考を必要としたが故、＜最も教養ある文人たちがこぞって＞≪何人かの最も優れた著作家たちが≫それについての書を著わさんとしたほどであり、その第一がホメロスにて、一人の智恵あふるる完全な人間のことを言い表すのに、その男は世界の様々な所に行き沢山の町や人々の風俗を見た、と書く他なかったほどであります[3)]。ことほど左様に、＜地理学＞≪この学問≫の知識は人間を賢くかつ慎み深くするのにふさわしいと彼には思えたのであった。その後他にも多くのギリシァ人著者が書いているが、中でもアレクサンデルに宛てたアリストテレス、スキピオの師ポリビウス、とりわけストラボンには膨大な著書があり、彼やアレクサンドリア人プトレマイオスの書は今の世にも伝わっている。ラテン人では、アウグストゥスの娘婿アグリッパ、モーリタニア王ジュバその他数多いが[4)]、彼らの労作は時とともに散逸し、これまた≪膨大な≫書を著したプリニウスの作品の中で読まれる以外には知られていない。上記すべてのうちではプトレマイオスが、時代が下るだけあってより博い知識を有しており、北方についてはカスピ海を越え、それが周囲を閉じた湖のようであることを知っていた。これはストラボンやプリニウスの時代には、その頃はもうローマ人が世界の主ではあったが、知られていなかったことである。かほどの知識をもってしながらも彼は、その海の彼方十五度まで未知の大陸を置き、昼夜平分線の彼方南極の方へも同様にする他なかったのである[5)]。これらの部分のうち、南方については一番先に発見したのは当代のポルトガル人船長たちだったが、北および東北東については、これからその書にさらにたっぷりとお読みいただくごとく、ヴェネツィアの誉れ高き貴人、偉大なるマルコ・ポーロ殿がほぼ三百年前にすでに発見していたのである。

最初そのマルコ・ポーロ殿の父と叔父が陸路東北東へタルタル人の皇帝グラン・カーネの宮廷まで、次には三人で東方とインディアの海を回って帰ってきた旅のスケールの大きさは、考えるだにまことにもって驚くべきものがある。加うるに、

当時かかる＜教養と知識＞≪学問≫に通じた者とてまだ少なく、また彼はあの未開のタルタル人の国に永く暮らし、＜雄弁術や文章の手本もさほどない＞≪なんらしかるべき著述の訓練も受けぬ≫がままに育ったにもかかわらず、かの貴人が目にしたるところをいかに相応しく書き記すことができたかについても同様である[6)]。かの書は、数多くの不正確な点や誤り故に何十年にもわたってお伽話とみなされ、そこに出てくる都市や地方の名もことごとく何の根拠もない作り事か空想、つまりいわば夢と考えられてきた。ところが百年このかた、ペルシャに往来した人たちによって、カタイオの地方が本当に存在することが認められ出した。次いで、アウレア・ケルソネーソ［マレー半島］を越えて北東へのポルトガル人の航海によって、かの著者が呼んだのと同じ名前をもったインディアの都市と地方それに島々が沢山発見された。さらにキーナ［中国］の地域を通ることによって、(ポルトガルの貴人ジョヴァン・ディ・バッロス氏がキーナの民から得たその「地理書」のなかで語っているごとく）[7)] キーナ［チャイナ］領の主要都市であるカントーネ［広東］市が,緯度三十と三分の二にあり、海岸線は北東および南西に走っていることが知られるにいたった。さらにまた、その海岸線は二百七十五リーグすぎたところで北西に曲がること、海沿いに三つの地方すなわちマンジ、ザントン［ザイトン泉州］、キンサイ［杭州］があり、キンサイは王の住まう首都で、緯度四十六にあること、海岸線はその彼方五十度にまで達していることなども知られるにいたった。[8)]

さて、かのマルコ・ポーロ殿の記した、世界のこの部分の詳細が我々の時代になって次々と発見されるのを見て私は、その書を、(＜私の見るところ＞)二百年以上も前に書かれた数種の写本に基づいて≪私の判断で≫完全に正しい形にし、今まで読まれてきたものよりはるかに忠実なものにして送り出して然るべきだと判断した[9)]。というのも、古代の著者たちによって未知の大陸に置かれた東北東への部分についての知識のために、かくも名誉ある学問をめぐる多大の勤勉と努力によって得られたその成果がこの世から失われることのなきようにと考えたからである。たとえその書に作り話のようで信じがたいと思えることが沢山書いてあったとしても、彼が語るその他の本当のことまで≪あまり≫信用しないというようなことがあってはならないし、とやかく言われてきたことに触れているが故にその大きな誤りを彼のせいにすることもあってはならない。ストラボン、プリ

ニウス、ヘロドトス他それに類する古代の著者たちを読めば、もっとずっと驚くべきどうあっても信じがたいようなことが書かれているのに出会うだろう。ところが、ドン・クリストーフォロ・コロンボ氏によって発見された西インディアのことを語る当代の作家については、我々はなんと言うだろうか。信じ難い金山銀山を描いていはしないだろうか。またびっくりするような姿形をした樹木や果物や動物たちを。金や銀でできているとはもはや誰も思い違いはしないが、当今のキリスト教君主たちの間にあった多くの戦争でひどく無駄にされたとのことである[10]。動物や果物や＜樹木＞≪植物≫については、しょっちゅうおびただしくイタリアに運ばれてくるから、彼らの書いていることが本当だとわかる。他でもないが、マンジ地方にあるキンサイ市の大きさは、ヘルナンド・コルテーゼ氏により発見された、かの豪壮で名高いムテズマ王の官殿と庭園のあるノーヴァ・エスパーニャ［メキシコ］の大都市テミスティタンに似ているとは思えないだろうか。[11]

また私は、この我らがヴェネツィアの貴人たちによる陸の旅と、前述ドン・クリストーフォロ・コロンボ氏による海の旅と，≪この二つのうち≫どちらがより驚異的＜で素晴らしい＞だろうかと内心何度となく考えたものだが、もし祖国愛が私を誤たすことのなければ、陸路による前者が海路による後者の上に置かれて然るべきといっていいのではないかと思う。なんとなれば、気の遠くなるほどかくも長く辛い道程を、しかもその間糧抹を欠くがゆえ数日ならぬ数か月にわたって自分たち自身と自分たちを運んでくれる動物たちのための食糧を携行せねばならなかったのであり、かくも困難な企てが実行されかつ成就されたその精神の偉大さを考えねばならぬからである。これに対して、コロンボは海路を行き、必要とするものをどっさり楽々と運び、風のおかげで三十日か四十日で目指すところに到着したのである。一方、彼らは砂漠や河をいくつとなく越えるのに丸一年を費やしたのだった[12]。また、新世界よりもカタイオへ行くほうがより困難で危険かつ長くかかることは次のことからもわかる。すなわち、これら貴人たちが二度そこに至った後は、この我らヨーロッパ側から誰一人として敢えてそこに赴こうとする者のなかったのに対して[13]、かの西インディアが発見された翌年にはもう沢山の船がその跡をたどり、今にいたるまで毎日無数の船が普通に往来しているほどだからである。また、その地域は普く知れわたり、今ではイタリア・スペイ

ン・イギリス間よりも交易が盛んなほどである。

さて、第一巻の冒頭の部分の（同書でマルコ殿により本書の序文と呼ばれている）ところだが、マフィオ殿とマルコ殿の父ニコロ殿がまずかの西方タルタリの君主の官廷に、そしてさらにグラン・カーネの宮廷へと至ったあの最初の旅については、もし幸運にも数か月前、沢山の言語を解する当代のさる人物によって最近ラテン語に訳された一冊のアラビアの書物の一部をたまたま手にすることのなかったならば、理解することはとうていかなわなかっただろうと、素直に告白せずばならない。その本は二百年以上も前、アビルファダ・イスマエルというさるシリアの大君によって編まれたもので[14]、今年一千五百五十三年はトルコ暦では九百五十年に当たるから、時にヘジラ紀元七百十五年のことである。その書につき知っておくに値すると思えることをいくつか手短に述べたところで、読者の皆さんを退屈さすことにはなるまい。

この君主はかの《カ・ポーロの》三人の貴人とほぼ同時代の人で、その書からもわかるとおり哲学と星占術に造詣深く、プトレマイオスの図のように、当時知られていた世界のすべての部分を詳細に記述したものを作ろうと考えた。そこで彼は、それらの部分の経度と緯度に関してすでに多くのアラブ人著者たちが書いていたことをすべてまとめて一つの要約のようにした。その要約の中で彼は、プトレマイオスについてはアラビア語に訳したから引用はしてもそのやり方には従わず、別の方法を採った。すなわち、縦横に何本か線を引きそれを花壇のように等分したあと、まず最初都市の名前が眼に入るようにし、次いでその都市について書いている各々の著者、続いて経度・緯度の違い、気候、地方、そして最後にその都市のごく短い非常に簡単な説明を置いた。まことにもって美しく簡潔な、アラビアの著者たち独特の並べ方である。というのも、アヴィケンナも薬草に関する第二巻で同じように、まず草の名前、次いで説明、そして最後にそれらに該当する効能と病気を並べるというふうにしているからである。[15]

ところで、その地理書は全部訳されているわけではなく、各地域に関する解説の大部分を欠いている。もしすっかりラテン語になっていれば、我々は同時知られていたアジア・アフリカ各地の詳細な地理を得、今日のごとき名で呼ばれている地方・町・山・川・海を、それらアラブの著者たちすなわちアットゥアル、カノン、ベンシディオ、レスム、クシロ[16]、それにプトレマイオスによって書かれ

たところにしたがって、経度と緯度でもって知ることができるのだが。そうすれば、同書と突き合わせることによって、アレクサンデルやストラボンの歴史に出てくる、今となっては推し量る他ない多くの古い名前についてのもっと確かな知識を得ることができることだろう。そうしたことがもし我々の時代に実現すれば、何とも素晴らしくかつ希有なことの一つとなろう。かの著者は、経度についてはプトレマイオスのようにフォルトゥナーテ諸島［カナリア諸島」からではなく、アフリカの最初の海岸から始め、プトレマイオスのとは十度異なるという。したがってプトレマイオスと対照なさる場合は、以下に同書から引用する経度においては十度下げるよう、読者はご注意ありたい[17)]。それはともかく、これを［ラテン語に訳して］世に出すという、かくも大きな恩恵を世界にもたらすには，どなたか偉大な君主の寛大なるお恵みを必要とするであろう。さすれば、武器によって獲得された大帝国や勝利から生まれうるものに劣らぬばかりか、人々の心のなかでまた後の世にも常に変わらぬ栄誉をその御方にもたらすことであろう。

とまれ、マルコ殿により序文と呼ばれている本書の冒頭の部分に戻って、その中でマルコ殿は、叔父と父はコンスタンチノープルを発ち、大海［黒海］をソルダディア［ソルダイア=スダク］なる港へ渡ったと言っているが、その地方の名前は記されていない。いくつかの写本にはアルメニアのと書いてあるが、私が手にすることのできた何冊か、ごく古く百五十年も前に書かれたものだが、それにはソルダディアとあるだけである。そこから彼らはバルカ［ベルケ］という西タルタリ［キプチャク・カン国］の大君の宮廷へと陸路出発した。さてところで、前述のイスマエルの書には、大海を北側から取り巻く地方と、カッファ市のあるタウリカ・ケルソネーソ［クリミア半島］について記した箇所で、キルミア［クリミア］地方には三つの都市、一つはソググット［ソルダイア］もう一つはゾダット［スタリイ・クリム=ソルカト］、そしてカッファがあり、ソグダットは、東に位置するカッファに対して西北西に寄っているとある。また、ソグダットは経度五十六緯度五十にある。続いて、コマゲル［マジャール=コーカサス地方北部］はバルカのタルタル人支配下にある地方で、鉄門とアザク［アゾフ=タナ］市の間、つまりかの門に対しては西に、アザクに対しては東に位置するとある。さて続けて、バルカのタルタリとアラウ［フラグ］の南タルタリ［イル・カン国、ペルシャ、今は東タルタル人の国と呼ばれる］の間にエロクツィという別の地方［テレ

ク川流域］があり、南タルタリの地にはヤクノ［イェズド」市があって、そこの住民は鉄門を通って往来すると言う。次いで、アザク海と呼ばれるメオティデ湿地について語り、東の方にエルタマン［タマン］市とその地方があり、そこはバルカ領の一番端であると言う。以上、このスルタン・イスマエルによって書かれたこれらすべてから、ガザリア［クリミア］とカッファのあるタウリカ・ケルソネーソの上方に、今日その港をもってソルダディアと呼ばれるソグタット市のあることが分かる[18]。次にアザク市、つまりアッサラ［サライ］を有する広大な地方たるクマニア［カスピ海北岸］にほかならぬコマゲル地方はバルカの領土であったこと[19]、これは、マルコ・ポーロ殿の次にお読みいただくアイトン・アルメーノの書にも述べられている[20]。さらにはまた、バルカの西タルタリとアラウの南タルタリがいたこと，彼らは鉄門、すなわち今日デルベンドと呼ばれ（伝説によると）イルカーノ［カスピ］海のほとりにアレクサンデル大王によって建設されたもの、を通っていたこと、したがって、バルカの領上の一番端はメオティデ湿地つまりザバッケ［アゾフ」海沿岸の東方にあったこと、などである。

さて、かの三人の貴人の旅の運命や以下のごとくである。すなわち、コンスタチノープルを発ち、大海をタウリカ・ケルソネーソへと渡る。そこは長さ二十四マイル、幅十五マイルの大陸と地続きの島で、ソルダディアの港そしてカッファがある。次いて陸路、クマニアにいるタルタリの領主、かのバルカのもとに赴く。そこにはアッサラ市がある。そのバルカとアラウとの間に戦闘があり、後者の敗北は前述アイトン･アルメーノも記するところであるが､そのため後戻りできず、クマニアを通って東に向かう他なく、バルカの領土を回ってオウカカ［ウケク］に至る。そこは鉄門近くのクマニア国境にある市で[21]、マルコ殿も本書で二度言及している。これはまた、チェルカス［ウクライナ地方の町キルカス］の住民がペルシャにやってくるときに通る道である。その鉄門を過ぎ、さらにチグリス川を渡る[22]。その川をアイトン・アルメーノはピソンと呼んでいるが、その箇所で彼は、小ペルシャ［フアーリズム］を征服したオッコタカン［オゴタイ・カアン］の息子ソドキのことや、その後継者がバラク［ベルケ］であることなどを語っている[23]。さて、かの二兄弟はチグリス川と砂漠を越えボカラ市に至るが、そこの君主が上述のバラクである。このボカラ市は,スルタン・イスマエルによれば、経度八十六・五緯度三十九・五にあり、その優れた学問により医者の間では我々の

時代に至るまで君主と呼ばれているアヴィケンナの故郷である[24]。以上が、かの序文の前半の部分の解説に当たるものである。

その後彼らは、ボカラから北東と東に向かってグラン・カアンの官廷へと伴われきたり、今度は彼から使節として教皇のもとに遣わされた。ここに戻るとき、小アルメニアにあるギアッツァ［ライアス］港に着く。そこは古くはイッシクス・シヌスと呼ばれ、ちょうどキプロス島の対岸にあたる。そこから海路アークレ市に至った。そこは当時キリスト教徒が支配し，ラテン語でアッカおよびプトレマイスと呼ばれ、教皇庁特使テバルド・デ・ヴィスコンティ・ダ・ピアチェンツァ殿がいた。彼は（イル・プラーティナが教皇列伝の中で語っているごとく）[25] クレメンス四世の後を襲い，グレゴリウス十世を名乗った。その在任時、アークレでは何人かのタルタル人君主がその権威に動かされてキリスト教徒になったとのことである。かの二兄弟は、語られてあるごとく、アークレを発ってヴェネツィアに帰り着き、そこで本書の著者マルコ殿を伴い、再びアークレに戻った。そしてそこで、それまで教皇特使だった選ばれたばかりの教皇の祝福を賜り、グラン・カーネのもとに案内すべく説教士教団の修道僧二人を同行者得た。が、アルメニアに至ったところ、そこはバビロニアのスルタン、ベンホックダーレ［ボンドクデル］によって引き起こされた戦争で混乱していた。これについては、かのアルメニアの著者にもみえる。

アルゴン［アルグン］王の妻として託された王妃とともにインドへと向かった帰路の航海ついてであるが、カタイオとマンジの地方のどこの港から出帆しのかは、その名が挙ていないから何とも言えない[26]。今ではしかし、ポルトガルの≪貴顕≫ジョヴァン・デ・バッロス氏の地理書の図にふんだんに見ることができるごとく、上述地方の港から東に進み、南東そして南へと向かえばインドに至ることはよく知られている。到着してみるとアルゴン王はもはや亡く、その子カザンが若年ゆえ、キアッカト［ガィハトゥ］なる者が領土を支配していた。アイトン・アルメーノは彼をレガイトと呼んている。次いで、ペルシャ国境にある「乾いた樹」の地にいたそのカザンに会うべく出向いたようである。カザンは後に、前述アイトン・アルメーノに見られるごとく、偉大な武将となった。「乾いた樹」は、その第一巻第二十章に詳述されているように、ティモカイン［ツノカイン」地方にある。次いで、通行許可を受くべくキアンカトのもとに戻り、黄金の札四枚を

授かり、それのおかげでトラビゾンダまて安全送り届けてもらうことができた。これはタルタリ人が、大海に至るまですべての王を、たとえキリト教徒であろうと、自らの貢納者として支配掌握していたからである。キアカトのもとを発って後その旅をするのに実際どの方向をとったかは、次のように推測するほかない。すなわち、そのキアッカトのいた前述アルゴン王の領土、そこはインダス川の上方にある領土の一つなのかもしれないが、そこを発って海路ペルシャ湾のオルムス島にまで至り、同書てケルマインと呼ばれているカルマニア地方に上陸し、次いでその地帯を通ってペルシァへと向かったものであろう。というのも、著者はオルムス島やケルマインの都市と地そしてペルシァに至るまで多く語っているからである[27)]。ペルシャは、＜アルメニアの＞ギアッツァ港からグラン・カーネの宮廷に赴いた道中では見ることが出来なかったが、この帰路では十分に見聞することができた。そしてペルシァから大海に向かってトラビゾンダに至り、そこからコンスタンチノープル、ネグロポンテそして最後にヴェネツィアへとたどり着いたのだった。[28)]

帰り着いてみると、二十年ぶりにトロイアから故郷イタカに戻ったときユリシーズの身に起こったのと同じことが彼らの身にもふりかかった。彼が何者か誰にも分からなかったように、この三人の貴人も永年祖国から遠ざかっていたがため、親戚縁者の誰にも見分けがつかなかったのである。彼らは、三人がもう何年も前に死んだものと堅く信じ、またそんな噂も伝わっていたからである。その貴人たちは、長く苦しい旅のためまた数えきれぬ苦労と心労のため、三人ともすっかり姿が変わり、ヴェネツィア語をほとんど忘れてしまっていたこともあって[29)]、風貌や言葉づかいに一種何ともいえぬタルタル的なところを漂わせていた。その服装はみすばらしく、タルタル風に厚手の布で作られていた。彼らは、当市のサン・ジォヴァン・クリソストモ区にある自分たちの家に向かった[30)]。その家は今日なお見ることが出来るが、その頃はとても 美しく高い建物であり、今は後に述べる理由によりミッリォーニの中庭と呼ばれている[31)]。ところが、そこには親戚の者が何人か住み付いており、眼の前に立っているのが誰であるか彼らに分からせるのに大変な難儀をしなければならなかった。というのも、三人の顔付きがあまりにも変わり身なりもひどかったものだから、それが何年も何年も前に死んだとばかり思われていたポーロ家の者たちだとは彼らにはどうしても信じられなかった

からである。[32)]

さて、これら三人の貴人は、(非常な高齢の貴人で親切で誠実な≪元老院議員≫＜偉大なる＞≪令名この上なき≫ガスパロ・マリピエロ殿、氏はサンタ・マリーナ運河に面したまさしく上述のミッリォーニの中庭の向かいにあるサン・ジォヴァン・クリソストモ運河の入り口の一角に自宅をもっておられたのだが、同氏から私が≪若い頃≫何度となく伺ったところによると、また氏もそれを父や祖父その他近所のお年寄りたちからお聞きになったとのことだが)[33)]、親族からの認知と市全体からの名誉を一気に取り戻すべく次のような一計を案ずることにした。すなわち、親戚縁者を大勢宴会に招き、自宅で催すその宴会をたいへん名誉あり豪華なものとなるよう用意しておいた。席に着く時間がくると二人とも、当時≪家に居るときは≫着用するのが普通だった、床までの長い深紅の繻子の着物を着て部屋から現われた。手を清める水が運ばれ皆を席に着かせると、その衣装を脱ぎ捨てて別の深紅のダマスクス織の着物を着、前のは断ち切って召使たちに分け与えた[34)]。そしてしばらく食事したのち、また別の深紅のビロードの着物に着替えて戻り、再びテーブルに着いた。そして二番目の服も召使に分け与えた。宴会の最後には、そのビロードの服も同じようにされた。そして再び皆が身につけているような普通の服を着た。これはもう、招かれた者全員を驚かせた、というより吃驚仰天させた。ところが、テーブル掛けを片付け、召使たちを部屋から下がらせると、今度は一番若いマルコ殿が席を立って一室に退き、そして家に帰還したとき着ていた＜みすぼらしい＞≪ボロボロになった≫厚手の着物を三枚手にして出てきた。そして彼らは、何本かの鋭いナイフで縁や二重になっている縫い目をいくつか切ってほどき、ルビー・ サファイア・紅玉・ダイヤモンド・エメラルドなど、とても高価な宝石をどっさりと取り出しはじめた。つまり、そこに隠してあるとは誰一人として想像も出来ないほど巧みに、その衣服の一つ一つに縫い込まれていたのだった。というのも、グラン・カーネのもとを去るにあたって、カーネから贈られた財産をことごとく沢山のルビーやエメラルドなどの宝石に替えていたからである[35)]。でなければ、かくも長く困難で悠かな旅の道中をそんな大量の黄金を運んで行くのはどうあっても無理だとよく知っていたのである。さてこうして数えきれないほどの宝石や貴石の莫大な財宝がテーブルの上に広げられると、そこに居合わせた人たちはまたもや驚嘆の念に打たれ呆気にとられて呆然

としてしまった。彼らは最初は疑っていたのだが、かくて三人がかのポーロ家の名誉ある勇敢な貴人たちであることを本当に認め、絶大な名誉と尊敬を捧げたのだった[36)]。

このことがヴェネツィアの街に広まると、さっそく市中が貴族も平民も彼らの家に馳せ参じ、抱きかかえて考えられるかぎりの愛撫と愛情と尊敬の念を示した。そして、一番年長だったマッフィオ殿を当時市でたいへん＜名誉ある役人にした＞≪権威ある役人にしてその名誉を讃えた≫[37)]。若者たちはこぞって、とても優しく雅びやかだったマルコ殿を毎日訪ねては話を聴き、カタイオやカーネのことを尋ねた。彼はごく愛想よくまた丁寧に答えたものだから、皆ある種の感謝の念を抱かずにはおれなかった。何度も何度もグラン・カーネの偉大さを語る話のなかで、その収入は黄金一千万から一千五百万に上るとか、その国々の他の富もたいていそうだとか、ことごとくミッリォーニ［百万］単位で挙げたものだから、人は彼のことを＜ミッリォーニことマルコ殿〉《マルコ・ミッリォーニ殿》とあだ名したのである[38)]。彼についての記録が載っている当共和国の公文書でもそう記載されてあるのを私は見たことがある[39)]。かくして、《サン・ジォヴァン・クリソストモの》彼の家の庭も、その時から今に至るまで世間ではまだミッリォーニの中庭と呼ばれているという次第である。

ヴェネツィアに還って数か月も経たぬ時、ジェノヴァ海軍提督ランパ・ドーリァ、ガレー船七十隻を率いてクルツォラ島に来たる、とのニュースが伝わり、市において直ちに＜多数＞≪九十隻≫のガレー船を艤装せよとのいとも貴き共和国総督の命により、マルコ・ポーロ殿はその一隻の勇敢なる〈総艦長〉《指揮官》に任命された。他の船ともども彼は、勇猛果敢な貴人で禿頭とあだ名れた《サン・マルコの執政官》、名声並ぶものなきアンドレーア・ダンドロ提督のもとにジェノヴァ軍に向かって進撃した。戦いは九月の我が聖母の日に行なわれたが（武運つたなく）我が軍は敗れ、彼は捕えられた。最前線にあって自らのガレー船を率いて突き進み、敵軍に体当たりし、祖国と同胞の安全のため雄々しくも勇敢に戦ったのだが後続を得ず、負傷して≪ダンドロとともに≫捕虜となったのである[40)]。かくて直ちに鉄鎖に繋がれジェノヴァに送られたのだが、その類い稀なる資質とかつての驚くべき旅のことが知れるや、町中が彼を一日見、語らんものと押し掛け、囚人としてではなく親しき友人にして誉れ高き貴人として遇した。そして大

変な名誉と愛情を捧げたものだから、同市のいとも貴き貴人たちの訪れぬ日とてないほどであり、生活に必要なあらゆるものが提供された。[41)]

さて、こうした境遇にあったマルコ殿は、誰もがカタイオの国やグラン・カーネのことどもを大いに知りたがっているのを見て、また毎日とてもしんどい目をして話を繰り返さなければならなかったものだから、それを書き留めてはどうかとの助言を得た。そこで、当ヴェネツィアにいる父のもとに、持ち帰った自分のノートやメモを送ってくれるよう手紙を書いてもらい[42)]、それが届くと、世界の様々なことを知るのをとても喜び、毎日獄にきて何時間も彼と共に過ごしてとても親しくなったさるジェノヴァの貴人の協力を得て本書を、その貴人を歓ばすためにラテン語で認めた[43)]。というのも、ジェノヴァ人は大部分今日まで己が生来の言葉をペンに書き表わすことを知らず、自分たちの出来事をそのようにして書く習わしだったからである。かの書は、このようにしてまず最初マルコ・ポーロ殿によってラテン語で世に出され、その後写本が沢山作られ、また我らが俗語にも訳されて、数か月ならずしてイタリア中がそれで一杯になったほどなのだが、それほどこの物語は誰からも待ち望まれていたのだった[44)]。＜私は最初ラテン語で書かれたその書の、驚くべき古い時代の、おそらくはマルコ殿自身の手によりオリジナルから書き写された写本に何度も目を通し、今世に送りだそうとしている本書と照らし合わせた。その写本は、所蔵者でありそれをとても大切にしていた我が親友、当市ギジ家のさる貴人から借り受けたものである。＞[45)]

マルコ殿が捕らえられたことはマッフィオ殿と父ニコロ殿の心をひどく苦しめ、二人は旅にあるときからヴェネツィアに還ればすぐにでも彼に妻を取らせるつもりでいたのだが、財産はたっぷりありながら世継ぎがないというそんな不幸な境遇に置かれ、息子の投獄が何年も続くのではないか、もっと悪くすると生きて帰れないのではないかと心配し（というのも大多数のヴェネツィア人捕虜は出獄できるまでに何十年もジェノヴァに留まったと何人もが二人に断言したからだが）、さらには何度も様々な手立てを講じてみたが、金銭をもってするいかなる手段でも彼を獄から取り戻すのはかなわぬとわかり[46)]、ともに語らってニコロ殿が、もうかなりの高齢ながら身体壮健でもあったから、再び妻を迎えることになった。こうして再婚後四年のうちに三人の息子をもうけ、一人はステーファノ、もう一人はマッフィオ、そしてもう一人はジョヴァンニと名付けた[47)]。ところがその後

数年ならずしてかのマルコ殿が、ジェノヴァの第一級の貴人たちや市全体から享けていた多大の好意のおかげで獄から解放され自由の身となったのである。家に戻ってみると、その間に父が三人の子をもうけているのを知った。が、そのことで心を乱されることは少しもなく、それどころか賢明にして慎み深かったから、＜父のよき決断を褒め、叔父マフィオ殿の願うがままにすっかり気持ちを落ち着かせて＞、自分も妻を迎えることに同意し、その結果男の子は授からなかったが二人の女児を得、一人はモレンタもう一人はファンティーナと名付けた[48]。ほどなく父がみまかると、慈悲深き善き息子にふさわしく、当時の状況からすればとても立派な墓を建てた。硬石造りの大きな棺で、今日なお当市のサン・ロレンソォ教会の前の柱廊の下、入って右側に、サン・ジォヴァン・クリソストモ区のニコロ・ポーロ殿の墓であることを示す碑文を刻んで安置されているのが見られる[49]。その家紋は、＜これについてもはっきり言っておけばその棺に刻まれているところから分かるとおり＞斜め帯のなかに三羽の鳥を配したもので、その色は、この高貴なる市の貴人たちの家紋すべてが色付きで載っている昔の何冊かの史書で見ると、地は紺、斜帯は銀色、三羽の鳥は黒で、当地で俗にポーラ、ラテン語では“グラクルス"と呼ばれる種類の鳥である[50]。＜これが、いとも貴きこの貴人たちの本当の家紋である。こんなことを言うのも、ずっと後年になると、自分はカ・ポーロの出だと名乗る他の多くの貴人たちが、鳥は同じ種類だがその配置も色も異なる別種の紋を掲げているものだから、この我らが考証によってかの誉れ高く勇敢な貴人たちの本当の紋章がどれか、いつの世にも分かるようにしておきたいと願ったからに他ならない。＞

この高貴で優れた家族の系譜が実際にはどれほど続いたかについてだが、＜ミッリォーニの中庭にあるあの家の彼らの相続人たちの間での財産の分割に関わる沢山のとても古い文書や記録、それが本物であることはその財産の所有権を相続して何年も経ち現在に至っている人たちが保証してくれたのだが[51]、それを見ていて＞私は＜誉れ高き貴人＞アンドレーア・ポーロ・ダ・サン・フェリーチェ殿に三人の子息があったことを発見した[52]。長男がマルコ殿、二番目がマッフィオ、三番目がニコロで、この最後の二人が、すでに見たごとくまずコンスタンチノープルついでカタイオに行った者たちである[53]。長男のマルコ殿が亡くなったおり、ちょうど妊娠して家に残っていたニコロ殿の妻は出産に当たって、生まれてきた

息子を故人に囚んでマルコと名付けた[54]。それが本書の著者である。父の二度目の結婚により生まれた彼の兄弟、すなわちステーファノ、ジョヴァンニ、マッフィオについては、マッフィオ以外他は子供があったかどうかは私には分からない[55]。マッフィオは五人の息子とマリーアという名の娘が一人あり、マリーアは、男兄弟たちに子供がなかったものだから、千四百十七年に父と兄弟の財産を全部相続し、当市のサン・スタイ区のアッツォ・トリヴィザーノ殿のもとに立派に嫁いだ。そこから後に、サン・マルコの執政官にして当共和国の勇敢なる海軍提督、＜忘れ得ぬ＞いとも貴きドメニコ・トリヴィザーノ殿の幸多く誉れ高き子孫が出自したのである。その徳と類い稀なる善良さは、＜現今、宗教と司法の最高の評価のもとに、我らがヴェネツィア共和国を輝かしくも統べ給える＞その子息にして高貴この上なき総督マルカアントニオ・トリヴィザーノ閣下その人の中に確と顕われいや増やしている[56]。以上が、我らが救いの一千四百十七年まで続いたカ・ポーロ出自のこの高貴な家族の系譜であるが、その年に上に述べたマッフィオの五人の息子の末子マルコ・ポーロが世継ぎのないままに世を去り、世の移り変りと共にすべて途絶えたのであった。[57]

さて、本書以前にすでにラテン語でか書かれた二つの序文があった。一つは、前述マルコ殿の親友で、獄中にあってその旅をラテン語で筆録し編纂するのを援けたかのジェノヴァの貴人によるものであり[58]、もう一つは説教師教団のボローニァのフランチェスコ・ピピーノ修道士によるもので、彼はラテン語写本を手にしたことがなく俗語に訳したものでしかこの旅行記を読んだことがなかったものだから、千三百二十年にそれを再び俗語からラテン語に戻したのである[59]。そこで私は、読者のさらなる満足と喜びになればと、その二つながらに訳して収録することにした。両方合わせてより豊かに序文の代わりになればと考えた次第である。

さて、以前リスボン市や紅海からカリクットや香辛料の生じるモルッケに至るまでの数多くの旅行記をもってアフリカやプレーテ・イァンニ［プレスビテル・ヨーハンネース］の国の事どもを収めた第一巻を献じましたと同様、本書もまた第二巻として少なからざる苦心をもってこれまでにかくも全体的かつ忠実に収録してまいりました東方ならびに我らが極の下に至るまでの東北東の地域についてのこれらその他の優れた著者をもちまして、閣下の誉れ高き御名の下に捧げられ

るでありましょう。さらにまた、コロンブスによって数々の征服をもって成し遂げられ、ついでコルテーゼ［コルテス］、ビッザッロ［ピサロ］その他の船長によって拡大されましたところの[60]、昔の人々には未知だった新世界への航海や、かのインディアの西北西の部分に位置するヌォーヴァ・フランチャ［カナダ］についての知識の語られますところの第三巻も、同じく閣下に捧げられるでありましょう。かくするよういたしましたのも、本書が、閣下の輝かしきお名前の偉大さと輝きから他の二巻共々、小生の浅学非才の与えることの適いませぬ権威と評価を戴かんがものと念じたからでございます。閣下におかれましては、かような次第ゆえ本書を、＜寛大なる御心と＞、小生もまたそれに注ぎますところの真摯さをもって御嘉納下さいますよう、さらにはまた、すでに世に問いましたもう一巻ともども、誹謗家どもの中傷からあとう限りお護り下さり、小生が大いなる信頼と確信をもちまして閣下の誉れ高き御名の御加護の下に捧げ、閣下のご好意をもってすでにつつがなく保護されました第一巻同様、本書もまたいささかの疑惑もなく自由に人々の手に渡るようご高配賜りますよう。

ヴェネツィアにて、一千五百五十三年七月七日。

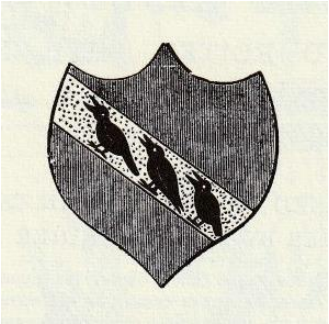


図２　ポーロ家紋（Yule, I, p. 8）

図２　サン・ジョヴァンニ・クリソストモ教会（外観）

図３　同（内部）

図４　サン・ロレンツォ教会（外観）

図５　同（内部）

図 6　クルツォラ海戦のヴェネツィア・ガレー船（想像図）

（Quinto Cenni - Henry Yule, The Book of Ser Marco Polo, the Venetian: Concerning the Kingdoms and Marvels of the East.より）

図 7　クルツォラ海戦でのジェノヴァ提督ラムバ・ドーリァの勝利

（Fedele Fischetti, 1782, Palazzo Doria d'Angri）

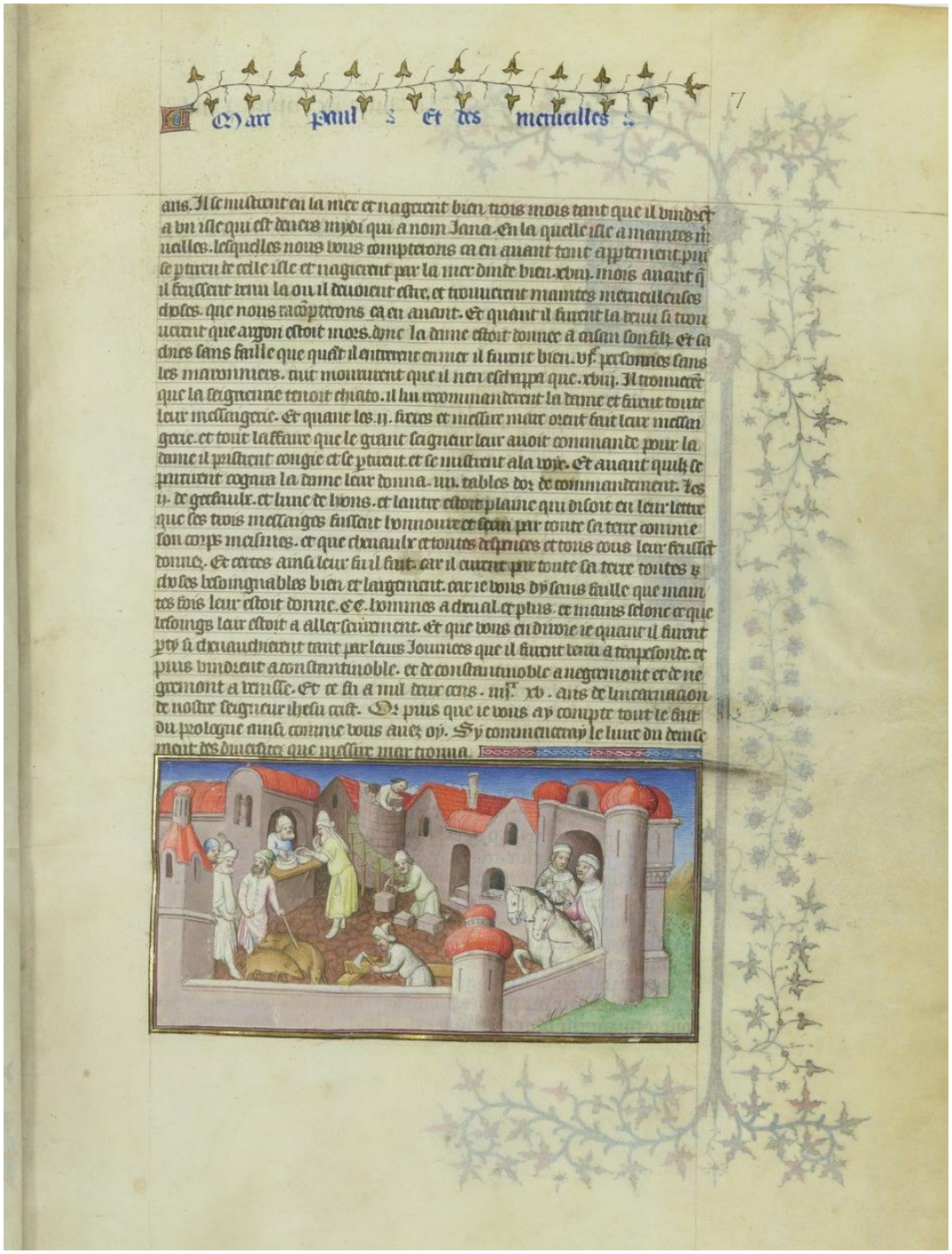


図 8　小アルメニア・ライアス（BNF fr. 2810, f. 7r）

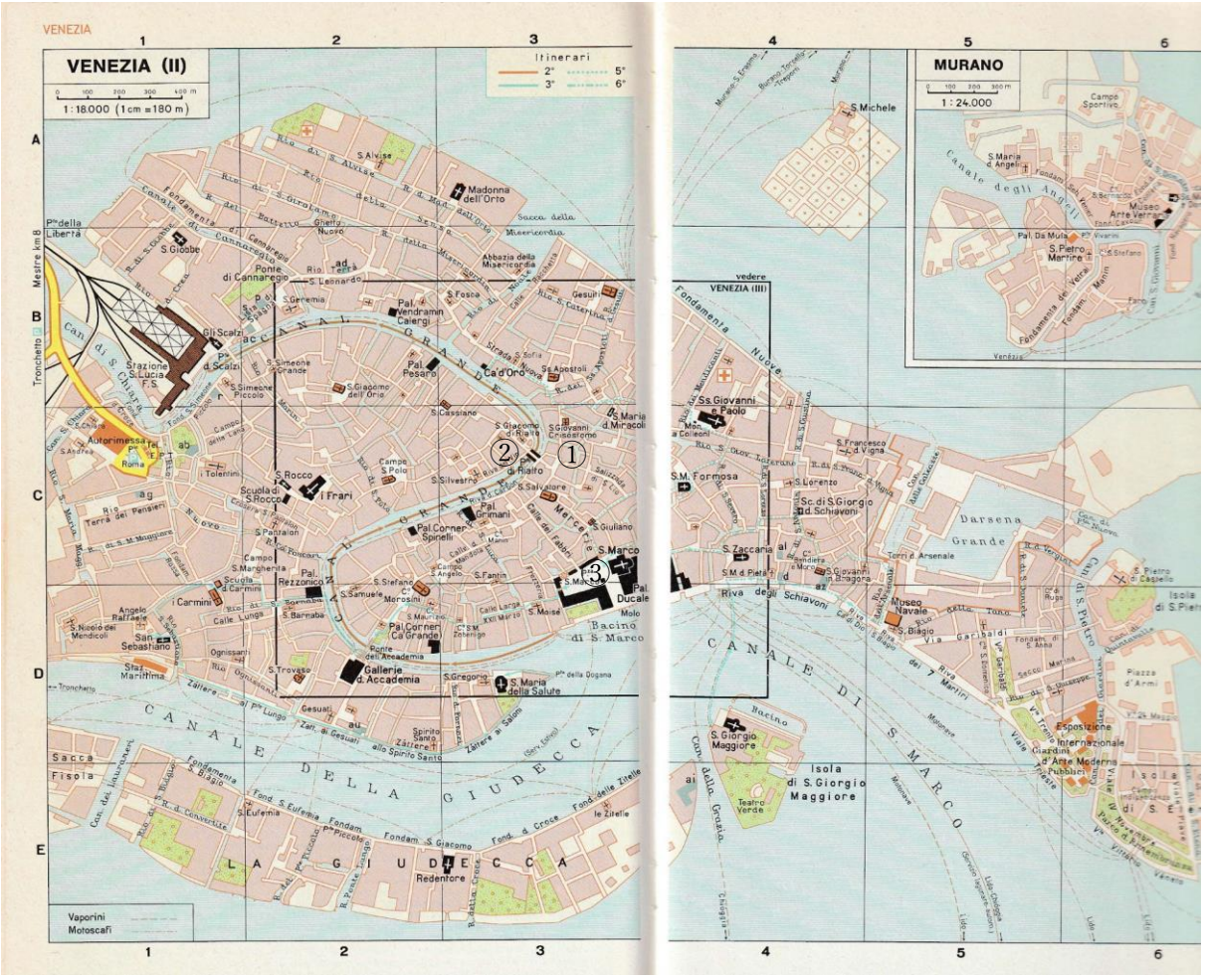


図９　ヴェネツィア図　①サン・ジョヴァンニ・クリソストモ教会　②リアルト橋　③サン・マルコ広場　（Touring Club Italiano, *Italia Settentrionale II*, pp. 228-9）